会計学基礎論（後藤）・過去問（1997 年度・ 1998 年 2 月 20 日実施）

注意事項

解答に至る途中経過および解答を指定された場所に書くこと。途中経過が正しくない解答は数値が正しくても点数を与えない。解答を得るまでの過程は理論的な整合性があれば、どんな方法でもよい。たとえば、八桁精算表を使用してもよいし、損益勘定と決算残高勘定を用いるようなものでもよい。

すべての解答用紙に学籍番号と氏名を記入すること。

問題 1

神戸物産は 2 種類の商品（A と B）を販売している。第 6 期に関する**資料 1～資料 3** を使用して、次頁の損益計算書の空欄（ア）～（コ）に当てはまる数値を解答欄にマークせよ。なお、配当、役員賞与等の利益処分は行われず、税金も支払っていないものとする。*は数字 1 桁を表している。（配点 50 点）

資料 1　第 6 期首の各勘定残高

繰越商品	\4,900	現金	\20,000	消耗品	\300
備品	\10,000	買掛金	\3,000	借入金	\1,500
備品減価償却累計額	\4,500	貸倒引当金	\400	売掛金	\8,000
前払保険料		未払賃借料	\200	資本金	\35,400

※残高は勘定の性質から判断して通常、存在する側にあるものとする。

また、繰越商品の金額¥4,900 は A 商品と B 商品の合計額である。

資料 2　第 6 期の期中取引（平成 7 年 4 月 1 日から平成 8 年 3 月 31 日までに行われた取引）

日付	内容
4.1	前払分の繰越分を再振替する。 新たに備品\3,000を現金で購入した。
5.6	店舗の未払いだった賃借料\200を現金で支払う。
6.2	A商品（@\50×100個）とB商品（@\50×100個）を仕入れ、代金は掛けとした。
7.3	売掛金\6,300を現金で回収した。
8.4	借入金\1,000を利息\200とともに現金で返済した。
9.5	A商品50個とB商品50個を現金12,000で販売し、代金は現金で受け取った。
10.1	一年分の保険料\3,600を現金で支払った。
11.2	A商品（@\55×70個）とB商品（@\55×70個）を仕入れ、代金は現金で支払った。
12.3	前期から繰り越されていた売掛金のうち、\300が貸し倒れになり、処理をした。
1.5	A商品40個とB商品40個を\10,600で販売し、代金を掛けとして処理した。
2.6	今年度から次年度にかけての店舗の賃借料\3,400を現金で支払った。
3.5	A商品80個とB商品80個を\18,000で販売し、代金を掛けとして処理した。
3.7	給料\2,000を現金で支払った。

資料 3　期末（平成 8 年 3 月 31 日）の決算整理事項

1. 商品に関しては 3 分法を用いて処理をしており、期首の繰越商品は A 商品（@¥49×50 個）、B 商品（@¥49×50 個）である。また、受け払いは継続されて記録されており、原価配分方法として A 商品は先入先出法、B 商品はそのつど後入先出法が採用されている。
2. 保険料のうち¥2,400 は前払い分である。
3. 期末の売掛金に対して 5%の貸し倒れを見積もり、洗替法により処理をする。
4. 借入金の利息¥200 が未払いである。
5. 賃借料の¥800 は次期の前払い分である。
6. 消耗品の実地棚卸高は¥100 である。
7. 備品に関しては、残存価値が取得原価の 10%、耐用年数が 10 年で定額法により減額償却を行う。

問題 2

上記の**資料 1〜資料 3** から A 商品と B 商品は、期首の繰越商品が数量・金額とも同じで、しかも期中の受け入れの数量・金額および払い出しの数量も同じで、原価配分方法のみ異なっていることが分かる。このことから、受入価格の動向と採用された原価配分方法が、その期の売上原価と次期への繰越商品の金額におよぼす影響について、商品ごとに次期への繰り越し金額を明らかにしつつ、簡潔に述べよ。

（配点 50 点、**注　部分点なし**）

第6期　損益計算書

売上高	*（ア）,***
売上原価	*（イ）,***
売上総利益	（　　）
給料	*,（ウ）**
賃借料	*,（エ）**
保険料	*,（オ）**
消耗品費	（カ）**
減価償却費	*,（キ）**
貸倒引当金繰入額	*,（ク）**
営業利益	（　　）
支払利息	（ケ）**
経常利益	（　　）
貸倒引当金戻入額	（コ）**
当期純利益	（　　）

問題 3

前頁の**資料 1〜資料** 3 に基づいて、神戸物産の第 6 期末の自己資本比率および第 6 期の売上高純利益率と総資本回転率を計算せよ。

その際、貸借対照表の資本の部の合計金額は、利益処分を行っていないため、期首の資本金に当期純利益を加算した額とすること。また、計算過程では式を明確に示し、割り切れない場合は下記の解答欄に当てはまるように小数点以下第 3 位を四捨五入し、2 桁目まで答えること。

さらに、貸借対照表の金額と損益計算書の金額が一つの比率の分子・分母に表われる場合、貸借対照表の項目については、期首と期末の平均値を利用すること。

（サ）〜（ナ）にあてはまる数値をマークせよ。（配点 30 点）

神戸物産の第 6 期末の自己資本比率は、（サ）（シ）．（ス）（セ）%である。
神戸物産の第 6 期末の売上高純利益率は、（ソ）（タ）．（チ）（ツ）%である。
神戸物産の第 6 期末の総資本回転率は、（テ）．（ト）（ナ）である。

問題 4

下の**資料 4〜資料 6** に基づいて、当期製品製造原価と期末仕掛品を計算せよ。なお、直接材料は行程の始点で一括して投入され、その他は加工進捗度に比例して投入されるものとする。原価配分法は総平均法を使用している。（ニ）〜（ノ）に当てはまる数値をマークせよ。*は数字 1 桁分を表している。（配点 20 点）

資料４　生産量に関するデータ

データ	個数
期首仕掛品	200 (50)
当期投入量	2,000
計	2,200
期末仕掛品	400 (40)
当期完成品	1,800

※括弧内は加工進捗度（%）を表している。

資料5　期首仕掛品原価内訳

直接材料費	80,000円
加工費	160,000円

資料6　当期製造原価内訳

直接材料費	1,820,000円
間接材料費	100,000円
労務費	1,200,000円
経費	500,000円

期末仕掛品原価は、（ニ）（ヌ）*,*円である。**
当期製品製造原価は、*,（ネ）（ノ）*,*円である。**

問題 5

引当金を設定するために要求される 4 つの条件を簡潔に述べよ。（配点 40 点）

問題 6

次の 2 つの用語を漢字に直せ。（配点 10 点）

(1)　ふくしきぼき　　(2)　めいりょうせいのげんそく

問題は、このページで終わりである。